
Ain Soph Aur

Sir.Fe

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A i n S o p h A u r

【Nコード】

N 4 7 3 8 K

【作者名】

S i r . F e

【あらすじ】

南部の小国マルクト帝国は隣国に攻め落とされ、皇族のほとんどは処刑され、国民は圧政に苦しんでいた。しかし、第三皇女であるティファレットと、アインが出会ったことで、帝国の運命は180°変わろうとしていた。

Section 1 (前書き)

小説第二弾！

駄文ですが、よろしくお願いします。

Section 1

人間は嫌いだ。平気で互いを傷つけるから。力を持っているのに、助ける力を持っているのに、それを傷つけることに費やす。力を持たない人から奪うために、力を持つ者同士で徒党を組み、権力を笠に着て、全てを蹂躪する。でも、きっと誰かが現れて、そいつらを倒してくれる。そんな幻想を糧に絶望をやり過ごしていく。きっと、きつとって。

でも、一番嫌いなのは、そんな区別なく人を殺める僕自身だ。全ての人間に、平等に絶望と死を贈る僕のこの手が、それを平然と眺めるこの瞳が。

僕は、嫌う????「死」を。

「ねえ、ティファ」

その声にはつとずる。

「い、居眠りなどしてないぞ。次の演習について考え事を」

「あゝ、はいはい。わかったから、落ち着いて」

明らかに、信じていない顔だった。

「とりあえず、帰ろう」

それには賛成だったので、荷物をまとめ、並んで歩き始めた。

「で、次の相手は誰だっけ？」

「・・・」

実際のところ、相手の名前など気にしたことがないため、今回も相手の名前どころかどういった戦闘スタイルなのかすら把握していなかった。

「そんなことを知らなくとも、私が勝つ」

「だろうと思った。まあ、あんたに勝てる奴なんてまずいないだろ

うから、そこは心配してないけどね」

「そこは、とはなんだ」

「いやいや、言葉の綾だよ」

さっきから胸を張って、一点を見つめ続けているミンスの、その行動と視線の意味に気付く。

「ミンス」

「大丈夫だって、そのうち大きくなるから。それに、それはそれで需要があるだろうし」

「殺す」

「おっと、ここで別の道だね。最近物騒みたいだから気を付けてね」

そう言うと、ミンスはさっさと行ってしまった。

逃げたか・・・。

もう、街が黒く染まり始めている。ちよつと、急いだほうがいいかもしれないと思ひ、気持ち足を速める。

道を歩く人々の顔は、どこか暗い。それを見る度、私の意思はかたくなる。占領されたこの街を、国を、必ず取り戻すと、強く心に誓うのだ。

しばらく歩くと、不自然なことに気付いた。この時間は人通りが少ないのだが、それにしても、人氣がなさ過ぎる。裏道にさしかかったところで、案の定不穏な気配を感じた。

「確かに物騒だ」

左腰に提げた剣をゆつくりと抜く。一、二、三・・・五人。ここは退いたほうがいいな。

左手で魔法陣を描き、呪文を唱える。

「求めるは、疾き風・・・《吹残》」

気配のほうに強烈な風が吹き付ける。魔法の発動と同時に駆け出す。

しかし、敵は怯んだ様子もなく追いかけてくる。かなりの手練だった。距離がどんどん縮まっている。まずい、このままだと逃げき

れない。

目の端に赤い光が見えた。

「求めるは、強き水・・・《飛泉》」

飛来する火の玉は、放たれた水弾と打ち消し合う。いや、相手の魔法の方が強い。相殺しきれなかった爆風に吹き飛ばされ、路地の塀に打ちつけられる。

「うっ」

すうーと、意識が遠のいていく。

まだだ、まだ死ぬわけにはいかない。

「希うは、捻じ切る颯・・・《劈剗颯》」

ティファの周りに、凄まじい嵐が起こる。止めを刺そうと近づいていた二人が、それに巻き込まれる。あと三人。

「希うは、刺し穿つ??！」

呪文は中断される。倒したはずの二人が、こちらに向かってきたからだ。

まずいますまずい。後がない。

残るは、突攻??？。

「それは、止めた方がいいと思うよ」

Section 2

いつからいたのか、背後に一人の青年がいた。

「相手は、生粋の殺し屋が五人。君一人が無策に突っ込んでも、死ぬだけだよ」

笑顔で、そう言った。

「なんで狙われているのか知らないけど、僕が片付けるから、君はそこにいて」

そう言つと、暗殺者の方に向き直つた。

「我、光を嫌い」

聞いたことのない呪文だった。しかし、その間に暗殺者達はこの闇入者を先に始末することを決めたようだ。

一番近くにいた刺客が、刃の短い曲刀のようなもので青年に斬りかかる。間に合わない、そう思った。しかし、その剣は空を切る。

「秩序を嫌い、調和を嫌う」

躲しながら、詠唱を続ける。

他の二人も合流し、三人の暗殺者が青年に向かう。だが、難なく躲し、去なし、決して捕まらない。まるでダンスでもしているかのようだ。

「我求めるは久遠の闇、永遠の混乱、永久の混沌」

ついに、残りの二人もその演舞に加わる。しかし、青年の動きは止まらない。

「《熄滅銷厭》」

圧倒的だった。まるで、影に食べられるかのように、暗殺者達が自身の影に沈んでいった。凶悪な、人を殺すための魔法だ。

「終わったけど、大丈夫？」

改めて見ると、まだ幼さの残る顔立ちで、とても暗殺者を一瞬で倒した人間とは思えなかった。しかし、先程の光景を思い出し、正視できなくなる。

「やっぱり、怖いよね。無理しなくていいよ、僕はもう消えるから」
そう言う彼の哀しみを乗り越えてしまった笑顔と、寂しさを帯びた瞳の色が私を動かした。

「おい！」

すると、驚いたように振り向く。

「その・・・なんだ・・・助かったぞ。礼を言う」

その言葉に、さらに目を見開き、何が可笑しいのか、いきなり笑い出した。

「君は・・・おもしろい人だね」

「なっ」

他人が礼をしたというのに、笑ったばかりか面白いだと？

「あれ？褒めたんだけど・・・なんで怒ってるのかな？」

「一度、自分の語彙を見直した方がいいな」

「え！おもしろいつて、褒め言葉じゃないの？」

「一般的には、認められていないな」

「うーん・・・じゃあ、楽しい人？」

「・・・もういい。私は帝立魔術学院クラスAの、ティファだ。お前の名は？」

「あっ！同じだね」

そう言つて、肩についた紋章を見せる。確かに帝立魔術学院の紋だった。

「僕はアイン」

しかし、妙だ。あれだけの实力を持っているのに、その名前を耳にしたことがなかった。

「あっ、そうそう。さっきの魔法、咄嗟だったから使っちゃったけど、本当はまずかったんだ。だから、二人の秘密にしてね」

「恩人の願いだ、もちろん従うが・・・なぜその力を隠しているのだ？」

あれだけの力があれば、軍でも相応の待遇が受けれるだろうに。
「うーん。言つていいのかなあ・・・。まあ、平たく言えばここの

皇帝が気に入らない、貴族に従う気になれない、ってところかな」
「・・・」

「あゝ、やっぱり今のなし」

「私はっ」

「え？」

「・・・いや、いい。忘れてくれ」

今、何を言おうとした？ 私の正体は、そんな簡単に明かしていいものではない。そう、まだ早い。

「同じ学院の生徒ならば、また会うこともあるだろう。これからもよろしく頼む」

そう言って手を差し出す。今はこれでいい。

「こちらこそ」

？？これが、後に戦女神と呼ばれる少女と、紅の悪魔と呼ばれる少年の出会いだった。

「我が君、例の姫様が、なんだか色々企んでるみたいですけど、どうしますか？」

透けるような茶色の髪に、鳶色の瞳をした少年が、まだ残る幼さに似合わない黒い燕尾服着て立っていた。しかし、胸の三本の剣を背負った獅子の紋章が、彼が見た目通りの存在ではないことを示している。

「もういいよ。楽しんできなさい」

「やった」

年相応の笑顔で、彼はその部屋を文字通り飛び出していった。

「明日は雨が降るかな」

我が君と呼ばれた男は、先程の少年とは対照的に物憂げな表情でそう呟いた。

Section 3

「なんかうれしそうだねえ」

次の日、ミンスが出会い頭にそう言ってきた。

「特に何もないが」

「えゝ 怪しいなあ」

なぜかは分らないが、冷や汗が背を伝っているのを感じた。

「おっと、そうそう。次の対戦相手、調べといてあげたよ。どうせ、ティファはそんなの気にしないと思ったから。えーっと……」

「……」

「うゝん、完璧なスルーだね、ティファ。いつそ清々しいくらいに」
「それで？」

「対戦相手は、アインっていう男子生徒。特に目立った話はないから、ティファなら楽勝でしょ」

「アイン？」

「うん、そうだけど……知ってるんだ？」
よくよく縁があるようだな。

「もしかして、想い人なのかな？」

あの男の力をもっと見てみたい。

「反応してくれないと、あゝんなことや、こゝんなこともしちゃうぞ？」

少しでも、あのレベルに近づきたい。

「本当にしちゃうぞ？ いいんだね？」

今から、演習の時間が楽しみだ。

「わぁーーーーん。ティファが構ってくれないよゝ」

「ミンス、周りに迷惑だろうが！」

「あつ、やっと話してくれた！ ティファが、アインって男の子に夢中で、ちっとも相手してくれなくて寂しかったんだよ？」

「おい！ 誰が??」

しかし、時すでに遅し。教室にいた全員が、こつちを見ながらヒソヒソと小声で囁き合っている。

「ミンス、そのアインとかいう糞野郎はどこにいるんだ?」

男子の一人が尋ねると、残りの男達も全員ミンスの方を向く。

「いや、彼、特定のクラスには在籍してないみたいなのよねえ。でも、屋上での目撃情報が一番高いわ」

よし、行くぞ！ おう！ と気合いの入った声をかけて、男達は出陣(?)していった。

「いやゝ、さすがティファだね。親衛隊まで持つてるんだから」

「そんなものを持った覚えはない」

「その流れるような金の髪、透き通る青い瞳、白い肌、そしてなにより生まれ持ったサディストとしての才能。男達が進んで従うわけだね。うんうん」

「へえゝ。ティファってそうやって人心を掌握してるんだ?」

予期しない第三の声に、驚いてその主に向かって剣を抜いてしまった。

「おっと、危ないなあ」

と言つて、後ろに一步退き、全然危なくなさそうに躲す。そこには、いま噂の人物が前と同じ笑顔を浮かべて立っていた。

「どちらさん? と聞くまでもなく、アイン君だね」

「ん、正解。よくわかったね」

「いやゝ、ティファの顔を見れば一目瞭然だよ」

その言葉で、自分の口が無意識に緩んでいたことに気付く。

「へえ、すごいね」

「へへへ、それほど」

「謙遜しなくてもいいと思うよ。ティファの表情を読み取るなんてすごいよ」

と、本人を前にして失礼極まりない会話をし続ける。

「いいえ、ティファレット様の表情を読み取るなど出来て当たり前」

ですが、出会って間もないあなた達では出来なくても仕方ないでしょうね」

第四の声に、二人は驚く。

「誰????」

そこには、見慣れた黒のフォーマルを着た優男が立っていた。

「わたくしは、ティファレット様にお仕える侍従のレーシュギールメルと申します。純真なティファレット様を誑かしたという不遜な輩がいると聞き、こうして馳せ参じました。さあティファレット様、ここはあなたのような高貴な人間が来るところではありませんわたくしと共に、城にお戻りください」

「何故来た？」

この男はそんなくたらないことを言うただけに、こんなところまで来るような奴ではない。

「先程の答えで満足できないようでしたら、セファルワイムに気付かれまして言えば御納得いただけますでしょうか？」

「・・・わかった」

「いえ、少し遅かったですね」

つられて窓の外を見ると、レーシュとおなじような格好の男たちが、こちらを見上げているのがわかった。

「ひとまず身を隠しましょう」

「そうだな」

「ねえ、ティファ？ 大丈夫なの？」

少し怯えた様子で、ミンスが尋ねてくる。

「狙いは私だ。お前達に危害は加えないだろう」

違う何かを強く訴えかけてくる瞳から目をそらし、アインの方を見る。

「また会おう」

「・・・」

「ティファレット様」

「分かった」

息を切らしたミンスが、廊下の先に立っていた。

「ミンス逃げろ！ こいつは化物だ。お前の敵う相手じゃない」

「その通り。お前みたいなカスが、ボクと戦おうなんて??」

「お前をちゃっちゃと倒して、ティファを助ける」

しかしミンスはセファルワイムの言葉を遮り、宣言する。

「図に乗るなよ、カスが！」

「ティファ、逃げて！」

求めるは、刺し穿つ赤熱の牙・・・《煌燬》」

このままじゃ全滅だ。まずはレーシュを運び出さなければ・・・。
引きずるようにして、レーシュを外へ連れて行く。幸い、セファルワイムの部下たちは、私たちが倒したので全部だったようだ。

空が暗かった??。灰色の雲は、途切れることなく続いている。
ミンスに加勢しなくては??。

まさに駆け出そうとした瞬間、校舎の壁が突き破られ、ミンスとセファルワイムが飛び出してきた。

「虫けらにしては頑張ったね」

セファルワイムのレイピアが、ミンスの腹を捉えていた。

「ミンス！」

頭に血が上る。気付いたら斬りかかっていた。

「バカだなあ。そんなに死にたいの？」

見えなかった。??剣はどこにいった? ??一体何が起きた?
痛みだけは理解できた。刺されたということだけは理解できた。
??目の前が冥い。

「残念でした。バイバイ？」

ここまでか??。

「陛下！ カステラムが落ちました」

「なに！」

隣国タイランが、ここマルクト帝国へ侵攻を開始してから四日。
異常なまでの速度で帝都へ進軍していたタイラン軍が、名実共に最

後の砦であるカステラムが陥落したとの報せが届けられた。力の差は歴然だった。誰もが平静を保つことなどできなかった。

「早馬を送れ！」

皆の視線が皇帝に向けられた。

「これ以上、我が民の血を流させたくはない。我らは負けたのだ」

「しかし！ それでは陛下が・・・」

「よい。我が命ひとつ、安いものだ」

もう、だれも口を開かなかった。

「陛下、私もご一緒させてください」

今まで何も望むことのなかった王妃が、初めて自分から願った。

「ははうえ？」

場違いな声の主に注目が集まる。

「ははうえ、とてもかなしそう」

幼いその声に、王妃の顔も曇る。

「レジーナ、お前は子供達を頼む」

「・・・わかりました」

？？しかし、降伏が受け入れられることはなく、帝都シン・マルクトはわずか二日で落とされた。

王である父と、妃である母は民の前で無惨に殺され、一番上の兄も共に殺された。二番目の兄はその三日後に。三番目の兄と二人の姉と私は、かつての王城に軟禁されていた。

幼かった私には、国が乗っ取られたことなどわからなかった。ただ、母を、父を、兄を殺したのはあの男だということだけしか理解できなかった。復讐を誓ったのは十三のときだ。二人の姉は、他の場所に移され、私と兄だけがここに残された。

しばらくして、あの男はある提案をしてきた。私の二十歳の誕生日までにセファルワイムを倒せば、国を返すと。乗るしかなかった。復讐を果たすためにも。

しかし、それも終わりのだ。

私は敗れたのだ。

これで、終わりだ。

『???? 本当に? ???』

『???? 終わりでいいの? ???』

「よく、ない」

音が戻ってきた。

「まだ、終わりではない!」

痛みは消えた。

『???? やっぱり、君はおもしろいなあ ???』

聞き覚えのある声だった。

『???? 力を貸してあげる ???』

左目になにかが入ってきた。異変はそれだけではなかった。

「見える」

万物の構成が見える。

内から聞こえる声は、告げる。

『???? 私は害敵を払う殲滅の光なり ???』

『???? 私は万物を成す創造の光なり ???』

『???? 私は存在を曝す顕現の光なり ???』

『???? 私は贈る、神々の《無限なる暎発の瞳》を ???』

Section 5

左目の違和感はなくなり、力の氾濫だけが続いた。

雨粒のひとつひとつの違いに至るまで、全てが見え、理解できるセファルワイムの動きも緩慢で、動き出しの拳動が手に取るようになる。時間の流れが、ひどく遅い気がした。世界が止まってしまったかのような錯覚を覚える。

「へえ、まだ動くんだ。ゴキブリ並の生命力だね」

奴の耳障りな笑い声も、このセカイの中では滑稽に映る。

「それは、貴様のことが、セファルワイム？」

「ふん、まあそんな口がきけるんだあ。もう少し楽しめそうだね」

「叩けば、潰れて、死ぬ」

「黙れよ！ 虫けらはお前のほうだろおが。アア？」

「かつて、神々に反抗した人間達は、降り注いだ槍の雨に貫かれ滅ぼされたという」

「ちゃんと殺してやるから、さっさと死ねよ、くそガアア」

「我は顕現する。咎人を貫いた雷霆の槍を???」
《神槍》

瞬間、世界は白く染まる。

[illegible]

全てのものがその光に触れ、光を失う。唯一、発動者である少女を除いて。

神の槍に貫かれたセファルワイムは、すでに事切れていた。

それを見届け、気持ち切れたのか、ティファもまたその場に崩れ落ちる。

「頑張ったね。一応合格だよ、我が主」

雨が、少女を抱え上げる少年を避けるように降っていた。

少年は、そのままレーシュに歩み寄り、小さく言葉を発した。すると、セファルワイムに刺された傷が、瞬く間に塞がっていく。そのまま、ミンスに向き直り、同じように小さく囁くと、こちらも傷が塞がった。

「これから、おもしろくなりそうだ」

「やはり雨だったな」

「殿下、どう処理しましょう？」

傍ら立つ青年が尋ねた。

「楽しくなってきたじゃないか。彼女との約束通り、ここから撤退しよう」

「仰せのままに」

「お前はもう少し楽しませてくれるのかな？」

茶色の髪に鳶色の瞳をした、精悍な顔つきの青年は、目で肯定した。

「楽しみだよ、セファルワイム」

雨はすべてを隠すように一晩中降り続いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4738k/>

Ain Soph Aur

2010年10月8日14時19分発行